

うして浮かんでいられるのかさえも分からない。「どこに行っても良い」と言われても、行くべき場所がなければ、どこかに行くべき理由もない。そうした漂泊船が、いわば水面のあちこちに浮かんでいるのである。「かけがえのないこの私」など、虚無のなかに聳え立つ蟹気楼のようなものではないか。彼らが「無気力」、「無関心」、「卑下」、そして「諦め」という病に苛まれているとするなら、それは彼らが〈存在の連なり〉との接続を絶たれ、〈存在の強度〉を著しく欠いているからだと言えるのである。

思えばこうした人々は、最初から〈ユーザー〉となって生きることを宿命づけられた人々でもあった。そしておそらく彼らこそが、〈関係性の病理〉と〈生の混乱〉に直面した最初の世代の人々であったと言える。〈故郷〉を捨てて〈郊外〉に定住したかつての〈旅人〉たちは、結果として、〈存在の連なり〉のもとで人が生きることの意味、そして「〈共同〉のための意味」と「〈共同〉のための技能」を次世代に伝えることはなかった。それゆえ、彼らの子どもたちは期せずして〈漂流人〉となった。〈漂流人〉は、〈役割〉を知らないし、〈信頼〉を築くことができない。そしていざ「〈共同〉のための事実」が現前し、互いに互いを必要とする理由が芽生えたとしても、多くはその試みに失敗することになるのである。

(6) 〈自己完結社会〉の成立

最後に見ていく「第五期」は、「第四期」以降の期間（2010年-）、すなわち2020年基準で言えば、われわれが生きる“現在”である。ここで生じている数々の事態が何を意味するのか、また後にわれわれに何をもちたらしことになるのか、そのことはまだ誰にも分からない。

例えば「第四期」に衰退した日本経済は、「第五期」に至って好転したと言えるのだろうか。統計資料をもとに「アベノミクス」の成果を主張するものもあれば、それが見せかけの砂上の楼閣に過ぎないというものもあるだろう⁽¹⁶⁷⁾。政権交代を遂げた民主党政権が3年あまりで瓦解して以来、野党の支持率は低迷し、自民党による一強体制はかえって盤石になったようにも見える⁽¹⁶⁸⁾。こ

の10年、国際社会の枠組みもまた変容した。この一文を執筆している2019年時点においても、「アラブの春」の帰結として出現したイスラム国（IS）⁽¹⁶⁹⁾、そのあおりを受けた移民問題⁽¹⁷⁰⁾、グローバル化に逆行する一国主義の台頭⁽¹⁷¹⁾、そして東アジアのパワーバランスと安全保障体制の揺らぎなど⁽¹⁷²⁾、「第四期」には考えられなかった事態が次々に浮上している——そして読者が本書を手取る頃には、ここで記した“現在”もまた、新たな想定外によって塗りつぶされることになるだろう——。

加えて目を惹くのは、科学技術がもたらした新しい現実である。われわれは【第一章】において、情報技術、ロボット／人工知能技術、生命操作技術が導く未来について、すでに十分見てきたはずである⁽¹⁷³⁾。例えばこの10年において、情報機器は驚くほど小型化し、AR、VR、IoTのほか、日々大量のビッグデータが蓄積、分析されるようになった。またディープ・ラーニングによって人工知能技術は新たな段階を迎え、自動運転から芸術、医療に至るまで幅広い応用が期待されている。そして生命操作技術で言えば、農業／畜産の枠を超えて、2018年にはゲノム編集を施された最初の人類が誕生したとも言われている⁽¹⁷⁴⁾。

他方で思想史的な文脈から言えば、「第五期」を代表するような新しい思想の形跡は、少なくとも筆者の実感では未だ見あたらない。社会的現実がごとごとく変質したにもかかわらず、そこには依然として、現実と向き合うための意味や言葉が欠落しているように思えるのである。驚くべきことに、多文化共生や国際平和の理念が揺らいでいくなかで、一時は「第二期」の政治的対抗軸が復活した様相さえ垣間見ることができた⁽¹⁷⁵⁾。おそらく人文科学の主流は、いまなお「第三期」に形作られた、「存在論的抑圧」からの解放と「自由な個性の全面的な展開」とをめぐる論点に終始しており、イデオロギーや権力構造の可視化、あるいはマイノリティの権利擁護に注力している。「ポストモダン論」について言えば、サブカルチャーの分析として一世を風靡することはあったが⁽¹⁷⁶⁾、時代の分析に関して言えば、いまなお「大きな物語」の解体を前提とした「接続」や「切断」の問題を脱しきれずにいるだろう⁽¹⁷⁷⁾。「第四期」に隆盛した「アソシエーション」や「コミュニティ」についても、一定の広がりを見せたものの、その後はすでに頭打ちの段階を迎えているように思える⁽¹⁷⁸⁾。要するにわ

れわれはいま、思想的な空白地帯にいたのである⁽¹⁷⁹⁾。

〈生活世界〉の実態についてはどうだろう。われわれはそこで、まさに〈自己完結社会〉が明確な形で台頭していく姿を目の当たりにしていると言えるのかもしれない。実際、現代科学技術を背景として、〈社会的装置〉が提供してくれる財、サービス、情報の質はますます向上し、われわれの暮らしは絶え間なく高速で、便利で、快適なものへと移行し続けている。それはまさに「〈ユーザー〉としての生」の全面的な展開であり、〈社会的装置〉がもたらす「自由」と「平等」がかつてないほどに拡大した社会の実現に他ならない。

しかしそうした時代にあって、心の病の日常化、高齢化する引きこもり、生涯未婚率の増大、孤独死の蔓延といった事態が語られるようになっていく⁽¹⁸⁰⁾。そしていつしか人々は、そうした社会のことを「無縁社会」とも呼ぶだろう⁽¹⁸¹⁾。とはいえわれわれは、一連の事態を単なる“関係性の希薄化”以上のものとして理解しなければならない。なぜならわれわれが生きているのは、すでに他者との間に〈関係性〉を構築すること自体が多大なリスクとして感受される時代であるからである⁽¹⁸²⁾。例えばなぜ、あれほど監視カメラを忌み嫌った人々が、いまではそれに囲まれた暮らしをむしろ望んでいるのだろうか。それはいまを生きる人々が、生活空間に侵入してくる〈社会的装置〉の影響よりも、他者との偶発的な接触がもたらす不測の事態をはるかに恐れているからである。いまやわれわれは、他者とのつながりを求める感情よりも、それによって自身の私的な時間、私的な空間が脅かされることの方をはるかに気にして生きている。それはかつて亀山純生が「孤人主義」と呼んだもの⁽¹⁸³⁾、あるいは広井良典が「自分自身に引きこもる」と表現しようとしたものが⁽¹⁸⁴⁾、確かな現実になったものだと言えるだろう。

こうした事態を反映するものとして、われわれは【第八章】において「不介入の倫理」という概念を導入してきた。そしてそれは、人々が自身の〈生〉にかかる全責任を自ら負うことの代償として、互いの〈生〉に介入することを積極的に拒絶し、あう倫理のことを指していた。人々はいまや、個人的な身勝手さからではなく、〈関係性〉がリスクや負担となることを熟知するがゆえに、つまり互いへの配慮という形で「不介入」を選択しているのである。すでに見たよ

うに、〈自己完結社会〉においては、人々は〈社会的装置〉への接続を必要とするが、その通路さえ確保できれば、生身の〈関係性〉を本質的には必要としない。そして「経済活動」や「情報世界」といった〈社会的装置〉の文脈上の〈関係性〉ならまだしも、一度そこから外れてしまうと、途端に〈間柄〉に窮してしまい、〈関係性〉の負担に耐えられなくなるのである。われわれはここで徹底した「不介入」の行使によって、いわば〈関係性〉そのものの成立を回避させているのであり、不用意に〈共同〉が出現することを抑制しようとしているのである。

こうした「不介入」という戦略は、例えば「第四期」の人々が、誰からも「見られていない」ことを恐れ、執拗なまでに誰かと“つながる”ことを求めていたことからすれば、いささか奇妙に見えるかもしれない。しかし、ここでは全社会的な関係性の希薄化とは裏腹に、人々自身の肌感覚としては、むしろ“つながる”こと、あるいは“つながってしまう”ことがもたらす抑圧こそが、「生きづらさ」として感受されるという、ある種の逆転現象が生じているのである⁽¹⁸⁵⁾。

こうした事態を先取りしていたのは、おそらく「第四期」の末期において、「承認不安」と関連づけて論じられた学校現場の問題である。例えば土井隆義は、若者たちが互いに傷つき、傷つけることに全神経をとがらせる「優しい関係」に終始しており、彼らが携帯電話を手放せないのは、それが彼らにとって仲間内での自身の立ち位置を確認する「社会的GPS」としての機能を果たしているからだと指摘した⁽¹⁸⁶⁾。また山竹伸二は、社会や家庭のなかで十全な承認を得られなくなった若者たちが、不安定な仲間内に過剰な承認を求め、その結果互いの顔色を絶えず窺う「空虚な承認ゲーム」に陥っていると述べた⁽¹⁸⁷⁾。これらが物語っているのは、新時代の〈ユーザー〉たちにとって、数少ない「意味のあるもの」であったはずの「島宇宙」の内側でさえも、すでに心休まる空間ではなくなりつつあったということである。

だが問題の本質は、彼らを感じる抑圧の向こう側にあるだろう⁽¹⁸⁸⁾。というのも「〈ユーザー〉としての生」が全面化した世界においては、もはや“学校”とは、根源的な「生きる」理由から浮遊した人々が、劣位の人間だと思われる

ことを恐れるばかりに、その場しのぎの〈共同〉をひたすら強制される場所、あるいは〈共同〉に対する理解も作法も未熟な人々が——〈共同〉の技能を教え、論し、失敗を克服していく機構を欠いた状態で——クラスメートという中身の無い〈間柄〉のなかに闇雲に放り込まれる場所と化しているからである。そこでは当然、〈関係性〉や〈共同〉の負担が異常な形で突出する。そしてだからこそ、彼らは「スクールカースト」によって教室を序列化し、自ら生み出した「キャラ」という名の即席の〈間柄〉に同化しようとする⁽¹⁸⁹⁾。それらは、歪ではあるが強力な〈間柄規定〉を伴っており、そうすることで、彼らはいわば揺らいだ「島宇宙」を安定化させようと試みているのである⁽¹⁹⁰⁾。

こうした事態は、「情報世界」の内部においても見られる。かつて「第四期」の初頭、インターネットの黎明期においては、自室にしながら無数の情報にアクセスでき、誰もが情報の発信者となって遠くの人々と交流できることそのものが新しかった⁽¹⁹¹⁾。しかし今日の「情報世界」は、かつてとは比較にならないほどに肥大化している。例えば今日のウェブページは、絶え間なく関連情報を吐きだし続け、われわれはすでに、見たくも知りたくもない情報を低意識状態のまま摂取し続ける「中毒患者」のようであるだろう。とりわけ重要なのは、「Twitter」、「Facebook」、「Line」、「Instagram」といった高度なSNSが登場し、それが人間関係を支える基幹的な「インフラ」となったことである⁽¹⁹²⁾。われわれはすでに「リアル世界」と「情報世界」の間で“二重のアイデンティティ”を複雑に同期させ、いまや日常的に接する相手さえ、SNS抜きで〈関係性〉を維持することが難しくなっている。「不介入」によって「リアル世界」が希薄化していく分、「情報世界」のなかでの“私”は、ますますその重みを増していくだろう。ところが「情報世界」が持つ特有の構造によって、ここでは「リアル世界」とはまったく逆に、人々はどこまでも感情的になり、どこまでも不用意に互いに介入しあうことになる⁽¹⁹³⁾。例えば“コメント”や“リプライ”を行う局面において、われわれは対面する人間には決して口にできないような嫌みや罵りや嘲りの言葉を、いとも簡単に吐きだしてしまう。さらには自らの思う「正義」に反する人々を探しだしては、徒党を組んで「抹殺」しようとしているだろう。その光景は、まさしく旧時代の人々が恐れていた“世間”の持

つおぞましき側面そのものである。驚くべきことにわれわれは、「リアル世界」で失われたはずの“世間”を、今度はよりいっそう毒々しい形で、「情報世界」のなかに復活させているのである⁽¹⁹⁴⁾。

そうしたなかで、おそらくわれわれは「〈共同〉のための作法や知恵」と言える最後のものを失った。それは、〈許し〉の解体である。われわれはいまや、他人の失敗も、そして自身の失敗でさえも受け入れることができなくなっている。ここでは、誰もが他者から許されることを信じていないために、誰もが他者を許すことができない。そして誰もが他者を許さないために、誰もが他者から許されることを信じられずにいる。このことは、「リアル世界」においても同じだろう。実際われわれは、「不介入の倫理」を徹底させようとするあまり、その違反者たちを発見しては責め立てている。そして自身もその規定に違反してはいないかと、日々異常なほどに気かけながら生きているのである⁽¹⁹⁵⁾。だからだろうか。人々はどこかで常に余裕がなく、皆がぎすぎすとした感情を抱えて生きている。そして「二つの世界」のあちらこちらにおいて、人間存在そのものに対する底知れぬ不安、恐れ、憎しみばかりが無数に蓄積されているのである。

さて、一連の変化から、われわれは何を読み取ることができるのだろうか。それは、われわれが〈ユーザー〉として自立しているからこそ、かえって〈関係性〉の負担が増大し、他者がいっそう抑圧的なものとして感受されるということ、さらにはその反作用として、皆が「不介入」を行使するからこそ、よりいっそう〈関係性〉の負担が増大するという悪循環である。そして問題の本質は、抑圧の背後に隠された一連の〈共同〉の不可能性と、それでもなおわれわれは〈共同〉を完全に避けることができないという現実との矛盾にこそある。**【第八章】**では、この「不介入」という戦略自体が、いまや多くの綻びに直面していることについて見てきただろう。われわれは人間である限り、望まぬ〈共同〉や、望まぬ〈間柄〉を引き受けなければならないときもあれば、仮面を外して「〈我-汝〉の構造」を通じて向き合わなければならないときもある。その一切を回避しようとするからこそ、「不介入」はかえってわれわれに多大な苦しみをもたらすだろう。いずれにしてもわれわれは、こうして「不介入」に励みなが

ら、その試みがいつ破綻しやしないかと日々怯えて暮らしているのである。

それでは「第四期」に見られた、あの「かけがえのないこの私」をめぐる葛藤、そして存在の浮遊性をもたらす、あの「諦め」の感情についてはどうなったのだろうか。まず後者について言えば、夢や個性に邁進して挫折した年長世代をよく見て育った新しい世代は、確かに安易に希望を語ろうとはしないだろう。しかし彼らは、どこか年長世代よりも深い「諦め」によって、むしろ最初からすべてを「諦める」ことにしているだけに過ぎないようにも見える。例えば彼らが「価値観など皆それぞれ」と吐き捨てる時、他者とは分かり合えない存在ではなく、すでに分かり合えるはずのない存在となっているだろう。彼らが恐れるのは、努力をしたからこそその失敗という結末、何かを信じたからこそその裏切りという結末であって、だからこそ彼らは、自己責任で対処できる範囲を精査し、そこそこ満足のいく現状だけを必死に守ろうとしているようにも見えるのである⁽¹⁹⁶⁾。

そしておそらく「第五期」の人々もまた、理想と現実との間で引き裂かれている。人々が信じることができるのは、おそらく自分だけの時間と空間、言ってみれば肥大化した「自分だけの世界」だけである。そしてそれは、他者という脅威から逃れることのできる、「かけがえのないこの私」の“聖域”に他ならない。こうした人々にとって、人生とは、本質的に「この私」で始まり「この私」で終わるものである。他の誰のものでもない、「この私」だけのものであって、それゆえ「この私」によって「意のままになる」べきははずのものである⁽¹⁹⁷⁾。これこそが人々にとっての「自己実現」の形であり、それは皮肉にも、自由選択と自己決定を至高とする〈自立した個人〉の究極の形でもあるだろう。

しかしどれだけ「自分だけの世界」が充実しようと、おそらく人々は、存在に揺らぐ自身の渇きが、「自分だけの世界」では決して満たされないということを理解してもいる。それでも「この私」の王国において、許容されるのは「この私」にとって都合の良いものだけに限られる。「この私」の物語において存在して良い人物は、言ってみれば「意のままになる他者」だけなのである⁽¹⁹⁸⁾。そしてだからこそ、人々は深く葛藤する。彼らはいまなお、誰かにしっかりと側にいてほしいと願ってしまうし、自分のことを、誰かに深く理解してほしい

と願ってしまう。それでも「不介入」の樂園に慣れ過ぎてしまった人々は、「自分だけの世界」を脅かすわずかな傷にも耐えられない⁽¹⁹⁹⁾。〈共同〉が求める負担など、いったい誰が背負えるなどと思えるのだろうか。そうして関わりたいときに関わってもらえず、関わりたくないときに関わりを強いられると、〈関係性〉に意味を求めること自体を、次第に「諦め」るようになるのである。

先にわれわれは、生まれながらに〈ユーザー〉となった人々、それゆえ〈存在の連なり〉から切断された人々のことを〈漂流人〉と呼んできた。かつて〈郊外〉で育った〈旅人〉の子どもたちは、成長して〈漂流人〉となった。「第五期」とは、そうした〈漂流人〉たちが成熟して壮年期を迎えていく時代、さらに言えば〈漂流人〉の第一世代によって産み育てられた、〈漂流人〉の第二世代が成長していく時代でもあると言える⁽²⁰⁰⁾。あの〈郊外〉の時代のはじまりから数十年の時を経て、われわれはそこに何を見いだすことになるのだろうか。例えばわれわれは、そこで〈社会的装置〉に付属する〈郊外〉であっても、年月とともに人間存在の〈生〉の履歴が、つまり〈生〉を紡ごうと人々が重ねてきた格闘の記憶、そして〈共同〉の記憶が芽生えていることを知るだろう⁽²⁰¹⁾。だが、それはかりそめのものではないだろうか。われわれの目に映るのは、整然と並ぶその人工物の塊が、一斉に高齢化し、一斉に老朽化していく姿である。その姿が物語っているのは、〈郊外〉が結局は一世代きりの使い捨ての街であったという単純な事実である。したがってかつての〈郊外〉は、その記憶を継承することなくいずれは消滅する。そしておそらくその場所に、あるいはまたどこか別の場所に、記憶を持たない新たな〈郊外〉が再び誕生することになるだろう。こうして〈漂流人〉たちが、再び生産されていくのである。

(7) “時代” と人間の〈生〉

さて、われわれは以上を通じて、およそ150年に及ぶ〈生活世界〉の構造転換について見てきたことになる。冒頭において述べたように、本章の目的は、〈自己完結社会〉の成立という事態を受けて、われわれがその意味を自身に連なるものとして理解すること、「死んだ事実」としてではなく、それを「場の連続